

第二十号 九月六日発行

# 東大斗争 獄中書簡集

世界のプロレタリアートは見たか？

△労働監獄の壁△

そして△東拘・小菅・中野・府中の壁△

壁が何かを語ることがあるだろうか？

だが沈黙しているものは

常にギョウ舌だつた

目

次

一、八月 九日	府中より	大村 康紀(仮名)一
二、八月 一八日	小菅より	松浦 謙一(仮名)三
三、八月 一九日	東拘より	小宮 順一(北海学園大)五
四、八月 一五日	"	内野 保雄(西南学院大)七
五、八月 二〇日	中野より	ゲバノ・イワーノフ(理共斗)八
六、八月 一五日	東拘より	野末 隆夫(広大)十
七、八月 一日	"	福本 敏(理共斗)十三

## 八月九日 府中より

大村康紀



△壁△救対差入れのパンフ「裁かれるのは誰か！」の表紙

△ベルリンの壁△スター・リンは失敗した。何故なら労働者はクレムリンに背をむけて、壁の向う側に幻想を抱いたから。だが

△クレムリン△を破壊せよ！打倒せよ！

△納走刑務所の壁△一九五二年、殺人事件をデツチあげた権力。そして、無責任に方針転換した日共。服役しているスター

リニスト△氏の一七年は何故の一七年か？△大村収容所の壁△彼らは「アリラン」を唱つているか、それとも……？

ここはアウシュヴィッツとどこでつながるか？

△世界中のプロレタリア解放の戦士がつながっている壁△彼らは空を見ているか？△この空を。

△世界のプロレタリアートは見たか？△労働監獄の壁△をして△東拘、小菅、中野、府中の壁△

壁が何かを語ることがあるだろうか？△だが沈黙しているものは常に饒舌だつた。

△壁△君達にとつてこれは何だ？と尋ねても、まさか怒りはないだろうね。

△日共の弁護士が、僕らの弁護を拒否したこと、いろいろ言

われていたようだが、労組員の首切り反対斗争に「トロツキスト」とか「修正主義者」だからとかの理由で、斗争支援を拒否し、資本家の手助けをするような「民主勢力」にしてみれば当然だろう。「トロツキスト」に対する弾圧が「トロツキスト」のみの弾圧に終れば結構なことだ。「トロ」が暴れなければ「平和」が続くかのようを幻想をふりまいて、ひたすら、労働者、人民の武装解除に専心しているが、そろは問屋が卸さない。過去の歴史を見るまでもなく（仮にも彼らが唯一の反政府であつた時代を思い浮かべてみれば良い。それとも、ある日突然、彼らは過去を喪失したか？）反権力、反体制が弾圧で潰された後には、体制内反対派である社民、更にはリベラリストでさえも、反動の嵐は容赦しないだろう。もつとも彼らが弾圧されるようなことは、絶対にやらない決意でいるのなら万事目出度い。彼らが弾圧されない道は唯一つ、常に△弾圧する側にいる△ことだ。「革命党」の代議士が「トロ」を弾圧しようと警視庁に直談判に行くのだから世の中平和ですね。

最近では、市民運動や救対活動に参加していく、あんなに優しくて美しい奥さん達にまで、「トロツキスト」とか「挑発者」とか言い出しそうな鼻息。その内、「一九一七年ロシア革命は、トロツキストがやつたのだから革命ではない」などと歴史の書き換えを始めるかも知れない。（もつとも革命的左翼を自称する諸君の中にも、△ロシア革命ースター・リン主義△と短絡させて一九一七年の評価を異にする人はいるが）つまり、「一九一七年頃は、トロツキストとそれに煽動された労

動者が暴れていました。その後（レーニンが病氣で倒れた後）  
スター・リンなどの眞の民主勢力がトロツキストを追い出して  
（或いは殺害して）ロシア革命は初めて成功しました」という

具合。諸君、「赤旗」に御注目を！

かねてより右翼なる人物と膝つき合わせて話をしてみたい、  
と考えていた僕だつたが、それが思わぬところで実現した話。  
他でもない、一月末、世田谷のK署に「厄介になつていた」頃  
お客として入つて来たのが、ある些細な「事件」でパクられた  
國粹主義者の連中。（國粹主義者というのは僕が勝手にそう言ふ  
うだけで彼らはそう思わないらしい。）  
何だか妙に大物ぶつた奴らだつたが、いざ話してみると、留置  
場生活の退屈しのぎにもならない程、バカバカしい論理。（恐  
らくK27号氏もバカバカしいと思つたに違ひない。）ただ僕が  
関心をもつたのは、彼らの間で山口乙矢（浅沼稻次郎を刺した  
テロリスト）は英雄であり、三島由起夫もかなり尊崇されてい  
るということ。だが慎太郎ナンはサッパリ。彼のプラグマチス  
ト的な政治的言動は余り好かれぬらしい。

それに「七〇年には自衛隊を必ず出す」と言つたこと。「アカ」  
は一掃するんだそうな。（ちなみに彼らはひどい色盲で黄色をも「ア  
カ」と思い込むほどだから、黄色テロリスト諸君には念のため  
御忠告致しておく。）まるで、彼らの力で自衛隊が動くかのよ  
うな口ぶりだつたが、まあ、その言葉にも一理ある。つまり彼  
らが言うには、自衛隊の幹部は、全て旧職兼軍人であり、「日

本帝國」の現状には非常な不満を持つてゐること。右翼の  
中にも「革命的右翼」はいるんですナ。

△

△婦人市民諸姉よ、戦いの火蓋はすでにきられた。ただ勝利か、  
さもなければ死あるのみだ！「もし、私が、私を愛する人たち  
を失わねばならぬものとすれば、我々の主義の勝利なんかどう  
だつていい！」と考える母や妻達は、最後に次のことを、よく  
合点してもらいたい。即ち、彼女らにとつて愛しい人々、彼女  
を援助する夫、彼女が望みをかける子供、を救う唯一の手段は、  
すでに始められた斗いに参加し、そして、ついにこの斗いを永  
遠に終熄させるにある。そしてこの兄弟殺しの斗いたるや、人  
民の勝利によらなければ決して終結しえないのであり、そ  
でない限り、近い将来において、必ず再び勃発するものである  
ということを！

△ 今度またもや人民が敗北でもするようなことがあれば、母た  
るものは禍なるかな！である。——一八七一年革命パリ婦人  
市民有志団アピール

△ 先日、僕は母への手紙の最後に「△反省△する気も△転向△  
する気もない」と書いた。

△ だが「サヨナラ」とは書かなかつた。

△ 最近、英國の國営大工場で山薪コストが相次いでいる由。労  
働貴族の説得にも耳を借さないで頑張る戦斗的なプロレタリア

達。だが悲しいかな、恐らく彼らには展望がない。妥協するか、敗北するか。

反動的な労働党は勿論のこと、スターリニストが遂に社民化した英共産党の下にある限り、彼らの眞の勝利はありえない。



中核派に対し、相変わらずおきまりの「批判」が出ているようだが、(とりわけ、解放派の諸兄)、とつくに「破産」した筈の中核が、これ程可愛がつて貰えるとは、白ヘルの諸君も苦笑を禁じえぬところであろう。

批判それ自体は全く有難いのだが、例のNAME・CALL INGでは、矢張りウンザリしてしまう。「共産主義者として斗うのではなく、生き生きと生きるために斗う」という主体性(?)も、まあ結構。だが、そう言つただけでは、まだ何も言つたことにはならないだろう。へ何を主張しているかでなく、何を行つているかに本質があるVというカツコイイ言葉もある。そうだから、その本質で批判してみたら?あまり哲学的な理論なので「単に機動隊とぶつかることができるだけの(これさえ僕には怪しいが)、そして君達が何を言つてるのかサツパリわからない程、頭の弱い小ブル」である僕らには空論としか思えない。だが僕らも自己点検は怠るまい。



最近は、論理的思考能力の減退や失語症の恐れさえ感じていて(まさか!)時は文章を書いてみるのも僕には必要に思われるるので、こうじう断章に相成つた次第。制限が三枚なので、

欲張つて書いたらこんな有様。

ひたすら編集委員諸氏の寛容に期待するのみ。

たつた三枚で「ラブレター」を書けとは絶対気に喰わネエ!。

△「安保粉碎・日帝打倒」を心に抱いた渡り鳥V

## 八月十八日 小菅より

松浦謙一

赤ヘルの同志諸君、元氣かい。K豚舎から連帯の挨拶を送る。警察署で、留置場という限界状況に耐えられるかいとねかしおつた検事の面も忘れる頃とあいなつた。

K豚面野郎はいやな野郎だつた……。生活空間が限られているといつた状況は、今もあの時も大して変らないが、留置時代と比べて、ここは時間の経過が何と早いことよ。独房の手の切れような水の冷たさも半年前の思い出となつてしまつた。

一月の三十五時間。放水のため、ガス液のためーあの三十五時間は色んなことを経験した一手がかじかんで石も投げられず、等々、緊張した三十五時間だつたが、アツという間に過ぎ去つた三十五時間でもあつた。

あの三十五時間の中、特筆すべきことは一赤ヘルの同志諸君の何人かは知つてゐるだらうがー三階屋内で公然と為された豚共のリンチだつた。我々は四階ヴエランダで、傍観していたことになるのだが、あの時は實に複雑な気持が去來したものだつた。

た。着ぶくれした岡つ引き共は女子学生を足蹴にし、つきとば

した。あの女學生の悲鳴は今でも脳裏にこびりついている。

夫を縛り、夫のみでいる前で、その愛妻を強姦することは、こ

たえられぬ快楽なのだそうだ。人間の獸欲のいやらしさ、ここ

に極まりといつたところだ、が、勿論俺はこのいやらしさが、

アブリオリなものだと思いたくはない。ブルジョワ社会の雜多

なうわすみと共に揚棄したいと思つてゐる（できるものなら）。

例が少し、露骨で、悪趣味であつたかもしないが、リンチされてゐる同志に何ら救援もしてやれぬ、あの時の俺の心境は、

この例の夫と大して変りはないと思う。

「機動隊の諸君、諸君も労働者ではないか、我々と共に斗おう」とか、悔蔑や憐れみで事足れりとするような気持ちは、あの時に限つて俺にはなかつた。「博愛主義」も時と場合による。俺はある時、イヌの一匹や二匹はバラせたと思つてゐる。敵をも包摶できる度量を革命家は身につければならないというのが俺の確信だ。つまり、反革命軍の指揮者を斃せば味方が何人か救われるという確率がある時、俺は何の躊躇もなく彼を殺すだろうということだ。ブルジョワヒューマニズム「汝殺すなかれ」で純化されるが、俺達の場合、殺らねば殺られる、という状況を見極めるだけである。殺らないことは敵を包摶しないことではない。汝、迷うなされ。

勿論憎悪が小・ブル的だということは俺も十分認識している。

類的本質存在だつた頃、憎悪などといふ感情はなかつたろうよ。

私有財産がどうやらその根源だということは、俺にも察しがつく。しかし、今の俺は、即ち的に、憎悪に依拠しそうだ。一

同志諸君、殺すときはニヒルに嗤つて殺そuzze。それがせめてもの救いだ。

「仲間」の足をひつぱることで自己満足してゐる諸君よ、諸君の行為が、誰を喜ばすことになるのか。この機關誌上のあの悪罵の羅列はどういう意味合いを持つのか？あれは門外漢が読めば、こいつらは誰を敵としているのか、ちょっと迷うだろう。

青解とて大して変りはない、我々のことを小ブル急進主義、宗教集団などといつてゐるが、君達がそうでないという証明を君達以外の誰ができるというのだ。君達のお題目がマスターべーシヨンと自家撞着のためにある、ということを誰が知らないと。どうのだい？諸君は、今度「全学連」をデツチあげた（尤も諸君はデツチあげたとはいわない、亞流は主流に集まれ！と連呼している。排外主義者よ）。「全学連運動をあらゆる宗派の特殊利害の追求に墮してはならない」と御託宣を述べている反帝学評議長某は自分達の「全学連」が自分達の思想の純化の場として位置づけることを前提としていることに、気が付いていないかのような発言をする。議長ともなれば氣付いていないはずはない。党派による大衆の引き廻しを、舌の根もかわかないうちに彼らはやつてゐるのだ。

階級斗争に党派斗争が必要なことは言うまでもない。しかし、少しでも革命に与するものであるならば我々は当然、彼らを盛

り立て、共に斗わねばならない。党派斗争は革命の主体を強化

するために保障されなければならないものだが、低次元な、足のひつぱりあいは、既に犯罪的ですらある。我々は敵を打倒しなければならない、そのためには、何が革命的であり、何が反革命的か、見極めようではないか。Zとの野合離反をちやんと総括してから、出直してこい、解放派よ。

左翼運動が非合法時代に突入するにあたつて我々は幅の広い柔軟な革命組織と大衆組織を持たねばならない。解放派の「全学連」はアナクロニズム以外の何ものでもない。又、日大全共斗や、東大全共斗が旧来のボツダム自治会運動の枠を越えたとして、全国全共斗連合を唯一の斗争機関と指定するML派はボツダム全学連がまだ役に立つ、ということを忘れてはいけない。ボツダム自治会運動の非合法といふ未来を先取りした形での全共斗連合は圧巻であるが、まだ非合法時代に入つたわけではない、利用できるものは利用すべきだ。勿論、全共斗連合は大衆斗争機関として絶大な役割を担つている。この機関を唯一の斗争機関と規定して、国家権力の好じにしてはいけないのではないか。非合法時代を迎えるにあたつて、全共斗連合は、権力のつけ入りを許さない。柔軟な且つ強固な形態に発展させねばならぬだろう。合法と非合法の接点となるべき機関も造らねばならないことは階級斗争に於て、自明ではないか？ML派の全国共斗連合論について思い違いをしているというのなら指摘してもらいたい。全共斗連合がボツダム全学連を揚棄するものであることは歴史の必然だろう。それだけに我々はもつと、こ

の全共斗連合に論を費すべきであろう。

俺は中核派が「全学連」委員長の名前を取つて、A体制とかKIM体制とか言うのが理解できない。単なる言葉の問題にすぎないと言つてしまえばそれまでだが、俺にとって、XX体制という言葉は生理的嫌悪を感じるもの以外の何ものでもない。

中核派の「ロマンチスト」達よ、遠くへ行つて、しまうをよ。同志諸君、赤は血の色、革命の色、俺の血はマジリツケない真紅の血だ。ドスやハヂキを使わねばならない時期はすぐに来る。精神的に肉体的に充分鍛えて来るべき「時」を待て！最後にもう一度、ニヒルに笑つて殺<sup>ラ</sup>そuz。それがせめてものなぐさめた。男飛車角は花の左翼よ

## 八月十九日 東拘より

小宮順一（北海学園大）

予告どうりに、十日間の実に樂しき「懲罰」ぐらし。

けど、どうにか、切り抜け、今は、何事もなかつた如くに「トリスマ・シャンディ」豚並みの生活です。

氏が、未決囚の生活に熟知していたか否かは知らないが（？）体重を計るんですね。終つたら。それで五十五kg。  
入所時五十二kg。五月初頭六十kg。どうやら、マイ・ベースの「ひよろ、ひよろ人間」に逆戻りか。

先日 父の手紙。「今年のお盆も、おまえ達一姫二太郎一の知つてゐる通り、勤めに出でいる。お母さんも同じ。けれど、

今日の、墓参は、私が三番方なので、雨天でなければ久方振りに行けそうです。」

九大 SFL の某氏も炭鉱に勤める父を持つとか。

又、その前にも、中核らしき某氏も同じ生活の……。

スクラップ・アンド・ビルドの嵐は、父と私の生活を、ゆさぶつたが、父は、坑外勤務から、坑内勤務へと配転になつた事で、病弱だつた父にとつて、それは、どれほどの決意の必要だつた事か。それ以来、父は晩酌を始めた、少量だけど。……表面は静かなものになつた。

あくまで表面は。

東調布で一諸だつた広大の Y 君。

君の名前は、以前か知つていたが、それを確認したのは、「前進」縮刷版。今も、元気だろうね。「寿司にビールをやりたいなア」と、云つていたが、しばらく駄目のようですね。神戸大の M 君。眼鏡を入手されたようですね。あれエ、と思つたら、君の顔が、千里向こうにありました。唯、無念は、私の公判の「学生証人」に貴公の同僚の名前のある事。

直きに 8/22 第三回公判。  
出廷拒否の他に道のあろうはずはないが、果して、他の「その」道とは如何に。

獄中書簡を何故、書くか。

簡単に言えば、僕の場合、暇だから。

書信、という、表現の仕方におのれの、生活者の、すべてを、賭すような、そのような、意味のみ。

そして、百年たつて、残ればいい、と云うのではなしに、この書信を一読し、ニヤリと笑う、同志のため、次号が来て、廢棄せねばならぬ迄の、ほんの十日余りのため、に、のみ、書いている。

笑わば、笑え。

そんな野郎のためじやないのであるから。

家族会北海道支部会開かる。と、前十二号にあつたようだ。してみると、支部と名がつきや数人以上の「被告団」北海道支部構成員がいるのである。

白ヘルのみに、書かさずに、元気を出せえ。  
ちなみに、広大のバリ、破壊さる。又、北大、七ヶ所、封鎖さる。  
馬ヲ引ケエ、坂田道太。加藤一郎、槍ヲ持テエ。  
白ヘル、札幌部隊。

## 八月十五日 東拘より

内野保雄（西南学院大）

Aさん、始めてお便りします。ほんとに毎週の差し入れがありがとう、もつと早く書くべきだつたのかも知れませんが、たつた五分間の面会と、手紙といふ二つのものがどうしてもつながらないよう気がして書くのがためらわれたのです。

一月東大闘争から早くも七ヶ月の月日が過ぎようとしています。

この間の七ヶ月にも日本の階級情勢はめまぐるしい激動の進転を遂げ人類史的一大転換期は、その中に様々な人間の生きた人間模様を展開しながら少しづつ、しかし着実に動いている様です。その歴史の激しい転換期に生まれ生きる人間の一人として、今、僕もその動き、人類史から見ればほんの小さな、しかし大きな人間のエネルギーをはらんだその動きに息づまるような興奮と緊張を憶えます。

一月以来の長い獄中生活で幸いにも色々な本に接する事ができました。そして今まで暗に霧の中につつまれていた多くのものが次第に明るみに出るにつれ、ますます自分の生きている時代が如何に人類史にとって重大な時期であるかを痛感させられるのです。そして、その中に生きるという事がどのように嚴しく、しかし、大きな喜びであるかをも同時にこの二重の鉄どう子の中の独房の生活と外の力強い斗いの報告を知るにつれ、身にしみて感じられるのです。思えば、過去二十数年間の中で、

この獄中生活程多くのものを僕に教え、そして変えた事は他になかつたといつていいと思うのです。それは、僕自身をして、人間とは何か、自然とは、そして歴史とはといった課題を探求せしめ、そして教えたのです。つまり人間の歴史とはどのようなものであるかといつた問題をとおしてその中に生きる自分は何かという事を開示したのです。それは謂わば、まだ自分自身が何たるかが分らない即自的生存から対自的生存へ、つまりこの人間の歴史をどのように生きるべきかという自らの世界觀を見い出す過渡にあると思します。

「世界觀とはその人がそこで死んでいい理由のあり場所なのだ。」と誰かが言っています。僕自身もなお一層強固な自らの世界觀確立のため、歴史の改革者たるべく、主体を構築しなければなりません。

今、この独房の白いカベを通して、外の情勢を冷静にしかも客観的に科学者の目で見つめる事ができます。自分が直接その中に参加する場合け少なくからず自分の感情、或いはそれに惑わされた錯覚等がはいつて来るのですが、ここで見る外の様子は実に気持のよい理解できます。そして外での斗いに注目をよせるのです。何故かといつて、僕らの唯一の支えは、それ以外にないのですから。

東大裁判斗争は、周知のように、まさに東大斗争にふさわしい司法権力とのまつ向からの斗いとなつています。我々はあくまで統一公判を貫徹し、司法権力の階級性を暴露し、我々自らが権力を裁く立場に立つ事の意味は、計り知れないものがあるで

しよう。しかしそれだけに敵の必死の反動攻撃も不可否となつてゐます。それに打ちかつたまにも、この長期拘留といふ獄中

生活をどのように受けとめ闘いとして克服するかは火急の課題だと思われます。

考へるに、この獄中の生活は、外で目まぐるしく変転する階級斗争とそれに対する自分という人間の関係、つながりといつたものに対し鋭く解答をせまられるように思われます。人間解放のために、搾取と抑圧から的人類の解放のために革命を志向する我々の存在とはどのようなものか、社会主义社会でもない、ましてや、共産主義社会に生きているのでもない、それへの過渡、まさに革命と反革命の激突の真正中に生きる我々の存在とは、どのように位置づけられるのか、闘いの中にある我々の存在とは、どのように位置づけられるのか、闘いの中にある我々の主体を如何にあるべきかといった形で外にいる時にはそれ程自覚しなかつた問題が強く感じられるのです。そういう問題と真剣に対決する中にこそ獄中生活に耐え抜く力があるのでしよう。幸か不幸かまだ、まだ時間は充分あるようですが、闘う強固な主体を構築すべく日夜、認識を深めなければならぬと思います。

Aさん、東大斗争の勝利へ向かつて、人類解放のために自己の解放のためにお互に最後まで闘いましょ。

乱筆悪しからず

## 八月二十日 中野 より

ゲバノ・イワーノフ（理共斗）

物言わぬは腹ふくるるわざにて。考えてみると中核とはワイ小な分派で、全学連の宗派固定の正当化に何か理論をデツチあげているわけでもなく、事実をワイ曲してゐるにすぎないのでから論破は実に楽だが、こんなチンチクリンの組織が大きな顔をして、「社民党」などと言えるといふのは、やはり高揚期なのだと思わざるを得ない。いまようやく行動委員会運動について明確な把握を持ちつつある所。その内以前割り当てられて全く不十分にしか展開できなかつた評議会運動論をまとめるつもりです。乞御期待！この秋の斗争は、非常に巨大なものにしなければならないと思うと、本当に出たいのだが、ここはここで戦線を切り拓くことにしよう。おおざつばに行動委員会の必要ということではなくて、クラスサークルの末端からの行動委員会の形成の重要さを、全国全共斗組成を見るにつけ痛感している。まあ、この話はこれ位にしておこう。先の手紙では17・18・19の連続斗争について、実に簡単に述べた。確認しておくことは、19日にエンブラが入港したこと、市民の大量の戦斗的な登場という新局面の内で労働者本隊との街頭における戦斗的な結合、あるいは連帶斗争を18日五万人集会を総括しつつ、21日にかちとること、これは50年安保が追及して果せなかつた、学生と労働者の共同の斗争を反戦青年委員会と全学連とのこの間の羽田以降の斗争における緊密な連帶を媒介として実現し、70年

安保斗争の序曲としての佐世保斗争において、労学連帯の橋頭を築くこと、このことによつて、羽田斗争が武装対決といふことで、繁栄を誇る日本帝国主義に階級闘争が厳然として口を開いていることを暴露し、反戦斗争を帝国主義の対外政策に対する斗争反革命階級同盟に対決する斗争へと労働者の内容を決する実力斗争をもつて労働者階級が核への感傷的対応、ベトナムへの同情的連帯一般から抜け出して、自らの階級としての運命を政治的頂点の政策の中に、そしてその現実化としてのエンブランの中に見抜き、いま一步斗争を労働者階級の自立した斗争として、うち固めること、中核が結局現地斗争の中にのめりこんで現地斗争も満足には展開できなかつたのは羽田以降の階級斗争のドラマチックな進行を現象上でしかとらえられなかつたことによる。再度、エンブラン入港後の21日の斗争の歴史的任務を確認する。実力斗争の展開、現地、中央を貫く政治斗争の展開、労働者本隊と学生との街頭・政治斗争における結合（昨日の「進撃」）には67・10・8は実力斗争の展開と伝統的（？）な反戦意識の解放で時代を画したとある。——ああ又、私は長々とあれや・これやをしゃべつている。しかし、佐々木君許せ。この手紙だけで、21日の佐世保斗争が全部叙事詩的に展開できなかつたとしたら、次の便りもあることだ——「進撃」を見る度に私は、腐臭をかぐ。この間は、駒共斗の座談会で「工がストに入つたつてあそこは二重自治会になつていいからインパクトをもたない」等と朝日ジャーナルの評論家そのままにしゃべり散

らしていた。こんな現実の重みをしらぬジヤリ共が、「駒場は70年斗争のキンタマをにぎつてゐる」などと知つたかぶりをぬかすのを見ると私はこの増上慢を「へ」でとばしてやりたくない。駒新の八本撤退に関する文章には、こんな浮薄さ、上つすべりはなかつた。いきどおりついでにこの間教対ニュースに私の原稿がのつたが、反ファシシズム行動委を、という部分、これは、ローテ・ファーネ等がこの方針を明確にする前に、私としてはこれだと思つていたもので、それ故私としてはいさか、自信のあつた方針、これが切られてゐる。泣きたくなるねえ。——あまり脱線しすぎたーともあれ、羽田斗争で单なるスクラムの上に、手の延長がつけ加わつたこと、これに対して実力斗争万才と総括するようなやり方——中核を筆頭として、そういう総括をするが一は現象として語つてゐるにすぎない。だからその後の斗争においてゲバ棒にふりまわされる転倒が幾度も起つてくるのだ。10・8が切り拓いたのは、もはや猶予のない、階級闘争を鮮明につき出したことではなかつたのか？こういうことがあたり前、前提だと思うような現実への対応は恐るべき不毛退廃である。——佐世保斗争は、この21日、現実に来るべきプロレタリア統一戦線の形成を私達の前に展いて見せた。さて、その日の朝から始めることにしよう。この日博多からの列車の中で私達は陽気だった。20日のカンパの大成功は、私達の絶えまい食えに終止符をうち、一日の休養は、三日間の睡眠不足を回復させていた。それ以上に九大前でカンパ帰りの私達を待つていた中の労働者が「全学連ですか？待つとつたとです。カン

「パさせてくれんですか？」と言つて、五百円もカンパしてくれた事等々、各人がそれぞれに斗争の一点における見知らぬ他人との出会いに豊富にされて、ふるい立つていった。いまこうしても、そのような個人を眞實に豊かにする斗争の一点における個々人の結合の一つ一つを思い出す。平瀬橋の佐世保市民病院、佐賀大不知火寮一風呂がわいてるぞ！と言つてくれた。佐賀大近くの病院の医師看護婦一ガスやけど半身水ぶくれの私の友人を見て、彼らは何と怒つたことか！機動隊の脅威に古い佐賀の町でおびやかされながらも、頑強に斗争を守り抜いている佐賀大生、とくにあの不知火寮生の斗争者としての連帯！私達は激烈な敵権力との直接の対決の中でつかんだこれらのものを大事に持ちながら、一步步を進めることを決意した。19日には佐正保駅の跨線橋をガニマタで登るほどに疲れ切つていたが、今や私達は勇氣にあふれている。21日、私達がスクラムデモを組んで佐世保橋に近づくと、既に橋上は騒がしい。中核が角材で機動隊にぶつかつたのだ。私は19日に、中核があれほどぶざまなことをやつたので今日は張切つているのかと思つた。ところが30人位が例の社共集会で民衆から奪つた木片れを持つて突つこんだに過ぎない。またたく間に蹴散らされて逃げる中核を分けて、中核を追い打ちにかかつた機動隊の真只中へ、青ヘル二〇〇の凝縮したスクラムが突撃した。元来、追い打ちにかかつた官憲は、かさにかかつて強いのが普通である。しかし、私達はメツタ打ちにされながら、おびえを感じなかつた。最先頭から、長崎大救対の最後尾まで、それは完全に一体だつた。

一中核の諸君、佐世保市民が見ている。彼らが和歌や詩にこの斗争を歌つた時、次の二節を入れたのは、彼らなりの目撃した重さを表現している。「反帝学評の青い帽子よ、昇天しよう。あの憎しみも争いもない、夕張岳の上の世界へ。」（註、最初の節を除いて、原詩に忠実でない。確か詩の題は「エンブランの見える丘」というもので、本の題名は残念ながら忘れた。博多の出版社が出版している。誰か詳しく述べてある人がいたら差入れてほしい。）全く、中核は労働者が目撃していた。というより市民の目撃の方が大事らしいので、あえてかかるくだけとを付け加える。一我々のスクラムは真一文字に佐世保橋上を突き進んだ。機動隊は、橋のたもとの装用車と放水車の防御線まで後退し、我々はここで対峙した。

今日はここまでだ。激しい雨が降つていて。台風と親しかつた私には非常に気持がいい。

時々、絶望の中を歩いている。ただ根が楽観的なので、そのたびごとに、文章ができる。実は何を隠そうマルエン全集とレーニン選集を始めから読みをしてみてKFの真価を知りつつあるところだ。「解放」バツクナンバーをそろえて読みたい。「解放」を一巻の本にすること、重要！

## 八月十五日 東拘より

前略 獄中斗争を貫徹する全ての同志へ、ながんずく中核旗の野末隆夫（広大）

下スクラムを組んだ同志、広島の熱いアスフルトのデモコー  
スをジグザグした同志へ。広島反戦集会から狂喜せんばかりの  
報告（狂喜といふ形容がオーバーでないことは独房で外からの  
息吹の届くを待つている同志諸君には実感として共有できるで  
ある。）をぼくだけの独占にせず同志諸君にも分配しよう。  
広大斗争推進を物質的に保証する我が青雲寮（十名の長期拘留  
者は寮としてはここぐらいなものだろう）の、また、精力的活  
動家のたまり場十一号室の同僚、（四・二八で起訴、現在広島）  
から寄せられたものだ。以下転載する。

拜 啓

お盆を涼しく過そうと思つて八日八幡浜に帰つて来ました。  
ペ平連主催で七日から十一日迄“反戦の為の万国博（ハンパク）”  
が大阪城公園で開かれ、井上清、高橋和己氏らが出席している。

ぼくも行きたかつたのだが、家族もやかましいのでやめた。

十一日には御堂筋十万人デモだよ。一方長崎では9日反戦集会  
十日大村取容所へ入管斗争（九時半のニュースで十二名逮捕と  
か言つていた）、八・六広島反戦集会以降ずつと多彩な行事  
(まちがい斗争)の連続で体がいくらあつても足りない。早く出  
出ていつしよにやろうぜ。ぼくもヒヨリながら斗争を続けるか  
らな。ぼく自身の為に。

保釈拒否の題問についてどう答えていいかわからぬ（いや、  
ぼくの意見を出すのが恐いと言つ方が適當だらう）ので、八・

六広島反戦集会を中心にして広島の様子を書く事にする。

八・六より大分前（余り前の事はよくわからないが）から、

原水禁、原水協、右翼団体（勝共連合）——大日本護国会、日本  
建国同志会）そしてぼくたちのステッカーが市内あるいは隣り  
の町まで張り巡らされ特に右翼団体は広大の前へやつて來  
て“千田町から暴力学生を追い出そう”とアジつていました。  
ピラ貼りでも広大生五人が逮捕（いや検挙）される等弾圧も嚴  
しく、その上に右翼にもピラ貼りの途中殴られることもあつて  
緊張した広島でした。機動隊も三千人余り動員して市民を守つ  
て（？）いました。

八月三日参院本会議で大学立法強々行採決、広大では四日医  
学部講義の粉碎デモ・五日に全共闘による粉碎デモ。五日の夕  
方になると中四学生、高校生、反戦、市民が続々と広大解放砲  
へ結集し、夕方六時から前夜集会、大学当局は集会に大学の使  
用を禁止すると言つて来たがそんな事は毎度の事で…。

六日八時十五分には広大ではインター・ナショナルが流れる（ぼ  
くは平和公園にいたので知らない）。昼過ぎ大学に帰つて来た。  
十時過ぎから学生は大学会館、反戦は教育学部大講義室、高校  
生は教養部大講義室（新しく建つたもので、マスプロ粉碎によ  
り一切使用するなど団交中）、市民は政經大講義室とどこも満  
員のようだ。暑さのせいで、木陰、芝生にいるのも圧倒的に多  
い。五時頃から学内デモにはいり、ぼくも百日ぶりにヘルメツ  
ト姿、広大のヘルメット部隊は五〇〇名を越えていたと思う。  
それに市民（ペ平連）や各大学の後についてデモツていたのも  
かなりいたので、広大生のデモ参加が久しぶりに千名位になつ  
ていたのではないか。驚くなれ、愛媛の地からも、高校生学

生だけで三十名位来ていた。理学部の建物の影が映る。誰かが十一・二二の縮図だと感動的に語つていました。そんなわけで

デモは壯觀、広大を六時に出発する前から、正門前周辺には圧倒的な群集、これにも驚いた。平和公園までそろそろ増えるばかり。デモ隊はジグザグ・フランス・気持がいいつたらありやしない。市役所前で先頭がサンドイッチにされ三名不当逮捕。

並進規制暑さも手伝つて、汗でズボンも服もビツシヨリ、本通りでのフランスデモの涼しくて気持のよかつた事。紙屋町を先頭が曲がる時、最後尾は金座街から現れず。再び平和大通そして平和公園。デモ隊二千〜三千、隣りを歩く群集も三千〜四千（もつといたかな）、平和公園噴水前でジグザグデモの末、平和公園へ突入。慰靈塔の前並んだ時は群集も含めて一万人余り、

涼しい風に吹かれてみんなの顔は底抜けに明かるい。市当局の平和公園は聖城であり、集会デモは一切許さない」という馬鹿げた弾圧をはね返しての本当に圧倒的なデモ集会、かくも感動的な場面に広島で遭遇できるとは夢にも思わなかつた。百日間の空白のせいかも知れないが、うれしくて楽しくて仕方がなかつた。

午前中の平和公園の事に移ろう。八時十五分過ぎに平和公園に着いた。原爆投下の時刻、何万という人間達が戦争遂行者の欺瞞的式典という枠の中にはめこまれて、それとは知らず黙禱していた（あるいは知つていたかもしれない）。それから、

“あいさつ”である。順に内閣総理大臣、衆院議長、参院議長（いざれも代弁）、広島県知事、県会議長、およそ平和とは縁

のない奴が原爆許すまじと語つている。現代のごまかしの典型がここにあつた。

しばらく歩いて学徒慰靈塔に来てみると、遺族代表が“国家の為に亡くなつた戦没学生にひきかえ、現在大学では暴力学生が……”と我々を非難。涙をのんで学問の眞理に叛いて戦争に行つた学徒はごまかしの慰靈塔の下で泣いているだろう。

そして訴えるだろう。“父より兄弟達よ、今又戦争への道を急速に歩んでいるのだ。大きく目を開いて世の中を見渡してくれ”と。統いて県知事“勲八等とやらを与えられて喜んでいるだらう”全くばかにしている。生き残つた戦犯代議士達は勲一等。“ナンセンス”と言つたら周りの人達がぼくの方を見つめた。

また歩いているとペ平連のフォーケゲリラに出会つた。「機動隊ブルース」「柴ちゃんのバラード」などを歌つたり討論をしたり、絶えず周りには百人以上の人人がいた。その後に討論の輪が二つ三つ。全体での討論の時、京都から会社を休んで来たという青年は強行採決の張本人を非難する人もいない。全く形式主義でガツカリした。失望の一語につきると感想をもたらしていた。東京からやつて来た人も同じよう語つた。昼過ぎになつてから歌を歌いながら広大へ。百人近くが反戦集会に合流。ぼくはやつとここで朝飯（？）、歌つてばかりいたので腹ペコ。これから後は初めて述べた通り。

八月七日には金山委員長の出獄記念講演があり、翌日八幡浜へ涙をのんで帰つた。ぼくは十六日か十七日に広島へ行く。今後

は定住します。

Eはノイローゼ気味とか（自分で言つてゐるのだから大した事はないだろう）。三層の部屋は暑いだろうが、肉体、精神共に消耗しないように！

敬具

久しぶりになつかしいたよりもらつた。こうしたたよりがどんなに待ち遠しいものであつたか、救対の諸君、わかつてもらえるかなあ。

拘留生活を続ける諸君、勝利は近い。拘留取り消しをかちとつてこよう。

## 八月一日 東拘より

福本敏（理共斗）

実験作「八月一日の自叙伝」

ボーチ・女の子と中年女と中年男・僕は昼寝から覚めたばかりだ。ベルが鳴り終る・どうだつた・面白い問題ばかりだつたじやないか・ユキ子さんはもう米国についたかなあ、夏休み中手紙出してみるよ、まあこれで育英会の奨学金をもらうあてはついたし、どこを受けようかなあ。ひよつとした夕立ちがあるかも分らんぞ、電車・電車・兄弟そろつて、山の中のブル。学生たちと中年女は論争している、病人の迷惑を考えているの、日射しは厳しいが風通しじゃなかなかよい、中年男はうなづく。休みごとにどこか体をこわすんだから、ガードを抜けて坂道を登ると病院がある、花街の真中の耳鼻咽喉科、耳の中を

けがしたまゝ泳いだんですよ、口が開かなくてクロロマイシンの大量投与、おやじの友人と会う医者と看護婦たち。今日こそ房内筆記許可願いをかこう、雨だ。かんかん照り、砂ぼこり、左ききの捕手・皆しまつてじこうぜ、ファウルだ、ちえつあいつ下手だなあ。何が根本問題かと云うことですよ、東大生つてそんなだとは知らなかつたわ。Kyo wa Teatoru Kobe e Elga o minikimasisita。全く暑いんだから、五日に帰ることにしましたよ、広島の方をまわつて。泳ごう、泳ぐ前には体操だよ、おつす、あれは中学校の時の同じ組の奴だ。何でもめているのか分らなかつたが僕は女の子に言う僕たちは病人がどうして病氣になり、その病氣をなおすためにどんな仕組の中で苦しめられているか、医者が単なる医療技師として、病院の中での階層分断を知つていますか、差額ベッドとか云つて、合理化に反対しているんですよ。耳を綿でふさぐ、赤外線照射、看護婦が別の椅子に坐らせる、ブドウ糖の注射をうけている患者がいる、痛そだな、待合室で赤んぼが泣き出す、ちえつろくな看護婦はいねえや。どういつたの、金をうごかしただけや、ああそりか、テレビの方ばつかり見てたらあかんぞ、誰かアイスクリーム買ひにいかんかなあ。今日子供会や、僕、副会長だから行かないわけにはいかないし、いやだなあ、どうせ町内掃除やし。俺は95日目、そうすると彼等は一九五日目だなあ。どうとう中年女も女子も少しは納得する、雑談、あたし芸術家よ、画を書くの、この間関西へ行つてきたわ、京都と大阪と奈良、それぞ違ひのネ、今年メキシコへ行く予定なの、元気な

お嬢さんだなあ。野球部の練習みてこう、運動場、先月の台風でユーカリの樹が倒れただままだ。ピツチャ交代だ、僕がピツ、チャ一になる、小便ボール、そらいい球だる。はいおしまい、薬もらつていつてね。家にいると勉強も出来やしないんだから、寮じやブール開放なんだ。くちびるが青いからちよつと休んだ方がいいぞ、悦子／弁当にしよう、もう、ああ十二時だから、へつへつへおにぎりだ。おー／＼風呂屋の横に集まれー。あら、さつきはどうも失礼、大きな声だしちやつて、ちようど昼寝から覚めたばかりでした、どうしてここに散步にきたの、東大つて広いわネ、ちよつと冷たいものでも飲みません、あたしが出すわ。まるでおたふく風みたいだ、病院の前の柳のところで振り返る。ガードをくぐつて商店街、古本屋。一班は南側2班は東と北側、3班は西側と路地の中溝におちないよう、葉山君僕たち二人で見廻りだ。ラジオ体操に来てるか、ううん。もうすぐ甲子園で始まるなあ、ああ、新しい家からだと三十分ぐらいだよ、自転車だと十五分ぐらいかな、帰えろうぜ、タコワカメがテニスしてたつて？ああ下手なんだ、牛乳でも飲んでいくか。ここで飲むか、ええ、指印を押す、差し入れ有難う。コーヒーは体に悪いわよ、ソーダーにしなさいよ、ええつとソーダー二つ。終つた班は風呂屋の横で牛乳がもらえるぞ。君どうして銀色のマニキュアなんかしてるの。角・銀とりだ、えつ桂馬で角が銀かいただきだ。死人の色なの、へえ、死人の色ねえ、君は芸術家だね、あなたもそり見たじよ。Eiga wa sei一bugaku to senssei gadesita。ちよつとおやくるの

腿が気になる。古本屋でちらつと写真を見る、誰もいないので安心して三頁ばかり見る。バタ足から練習しろよ、手をひいてやろうか雲が太陽をかくす。うん詩を書いたり、小説を書いたり、もつとも完成した小説はないんだけど、絵もかくよ、詩見ていただけないノートの裏側にはしりがきしたやつを見せる、彼女が小声で読み出す。雨が降り出してきてわ、皆いるか、更衣室へ入ろう、じや、ぐーばい、こんどは15日だよな、うんそうだ15日だ、バスを待つ、暑いなあ。古本屋を出て商店街を抜けて、電車のりばだ、出発まであと5分か、ああアルバイトの約束なんかしなければよかつた、じや私は帰るわ、あなたの住所教えていただけない、あたしはヨコよ、彼女はノートの裏側に書く、お電話してよ、アルバイトがなければ強引に映画にでもさそうのだがああ全く残念だ。（未完）時間がなくなつたのでおしまい。出来たら続きを次のときにかくよ。

では又、元氣でやつてくれたまえ。

た い ふ う

おちるかしら

おちないよ

おちそうよ きをつけて

おちないつたら  
でも おちたら あぶないわ

あつ おちた  
おちたでしょ  
ふーちゃんちのかわらがおちたよ

どうしたの

ふーちゃんちのかわらがネおちたんだヨ

あぶないからいえにはいつてをさい

ふーちゃんちのネエ

まあ こんなにぬれて

かわらがネエ

ふくをきかえなさい

おちたんだヨ

へえつ

ほくみてたんだ

そりかい

こんなふうにとびながらだヨ

(禁公開)

五月二十七日以来分割裁判を強行してきた東京地裁は、八月二十日「夏休み」を終えて浦辺、熊谷裁判長等の「ハト派」の「分割裁判強行宣言」をもつて再度の分割裁判一欠席裁判の強行を行つてゐる。ここにあつて我々は、統一公判獲得斗争の意味が再度問われてゐると同時に、裁判斗争として我々が何と斗つているのかが問われてゐる。

八月一日の統一教対、八月三日の被告団事務局会議は、職権保険拒否を決定し、二十六日の統一教対において保険拒否に反対に反対の党派があるにもかかわらず、共同行動をとるため、少なくとも九月末に再検討の討論を行ない結論がでるまで保険拒否を貫徹することが確認された。この保険拒否は既に議論されてゐるよう、我々の裁判斗争一在監者の出廷拒否、保険者の法廷における徹底的な彈劾斗争一によつて、地裁が欠席裁判をやらざるをえなくなり、階級支配の最後の機構としての裁判所における赤裸々な階級的な亀裂を生じざるをえなくなつたことに対し、職権保険を出すことによつてあからさまな欠席裁判の強行を避けて分割裁判を貫徹せんとしていく攻撃に対する我々の斗いである。

この東大斗争裁判斗争の分割裁判粉碎の斗いと統一公判獲得の斗いは何であるか。それは単に統一公判が獲得できれば素晴らしい

## 「被告団」通信

んだとして、分割裁判に反対してきたのではなく、分割裁判と  
という形で東大斗争―全国学園斗争の中で作り上げられてきた  
斗いをブルジョワ社会の力をもつて破壊しつくすいう攻撃に対  
し、あくまでも我々の斗いを防衛し、このような攻撃と全面的  
に対決していく斗いとしてある。1月の弾圧に対して、弾圧一  
般として弾劾することではなく、議会制民主主義から社会の底  
辺における諸個人への支配として、この全体の支配構造を法律  
として表現し、この社会に反逆せんとする部分に対してはその  
法律の名を以つて抹殺してゆく事に対する我々の全存在をかけ  
た斗いとして裁判斗争を斗わねばならないであろう。

**職権保釈拒否の斗い**は確かに、「外」の斗争を担うというこ  
とからいえば「犠牲」を必要とするだろう。しかし、「外」の  
斗争をどのように斗いとして進め、同時にこの裁判斗争をその  
斗いと結合した斗いとしてどのように斗うかということが問題  
である。だからこそ、統一公判獲得斗争が、裁判官の頭の中に  
あれこれ反映されるという斗いではなく、七十年安保、沖縄返  
還を通して本格的な帝国主義的な海外圏を作り上げ、国内にお  
ける巨大な監獄秩序を確立せんとしている日本の社会の總体を  
明らかにして対決してゆく斗いとして七十年安保粉碎斗争と結  
合してゆく斗いでなければならぬ。そして、「被告」が裁判  
官の恣意的な判断によつて「外」に出るというのではなく、この  
ようを斗いの発展をもつて「被告」を奪還しなければならない。  
このような斗いとして裁判斗争を斗うために「被告」は屈服し  
てはならないのであり、それを抜きにして法廷に出て斗うとか、

被告が運動を組織するとかいつても、現実の支配者の攻撃に無  
力なものにしかならないだろう。

統一被告団は、九月六日総決起集会を開催する予定である。

今までの被告団の運動が、被告団の結合した斗いとしてはなし  
えず、特に地方の被告との連絡さえも十分取りえていないとい  
う現状にあつて、今後の強力な裁判斗争の展開のために、如何  
なる総括と方針をもつてこの裁判斗争を斗つてゆくのかとい  
事を厳密に意志一致しなくてはならない。そしてそのためには  
組織的な保証として各地方、大学における被告の組織化を進め  
ねばならない。

被告団としては、今後の裁判斗争の方針について、「保釈拒  
否」「出延拒否」を含めて獄中の同志諸君の問題提起を期待し  
ており、活発な意見の表明を要請します。

統一公判獲得、分割裁判粉碎!!

欠席裁判弾劾!!

4・3分割案白紙撤回!!

分割裁判強行のための職権保釈策動粉碎!!

騒乱罪、破防法適用粉碎!!

大学立法の発動、適用粉碎!!

全国全共斗の結成をかちとう!!

七十年安保斗争に勝利しよう!!

## 編 集 後 記

余りにも熱い太陽がぼく達の頭上を照りつけていた夏。その長い夏も虫の鳴き声とともにいつしか過ぎ去り、九月。夏の間見えなかつた友の顔も再びキヤンバスの中に現われる。

昨日、九月三日、ぼく達は全学総決起集会をも

つた。全国全共斗連合結成の意義が確認される。五百名の武装部隊による本郷キヤンバスの制圧。

折りしもその日早大に官憲が導入される。早大全共斗の数時間にわたる学館死守の斗い。今回の導入は二日後に迫つた全国全共斗連合の結成に恐怖した政府ブルジョアジーの特殊利害の貫徹でしかなく、その故、この弾圧、そして今後に予想される弾圧を突破し、粉碎するだけの内実をもつた全共斗連合の結成が九月五日圧倒的にかちとられなければならない。全共斗連合は十一月佐藤訪米阻止斗争を手ハジメとする七〇年代激動期を展望した、教育斗争＝政治斗争＝社会斗争を担いきる実戦部隊として結成されねばならない。

八影丸V

非売品・無断転載禁ず!!

第二十号 九月六日発行  
発行者 「獄中書簡」発刊委員会  
委員長代行 加藤二郎  
△連絡先 文京区向丘一の十二の七  
東大追分寮内  
電話 八一一二三六八  
真崎猛哲

分離公判粉碎日程表

月 日	時 間	グ ループ名
9月 8日	1 0 : 0 0	安 田 2
9月 9日	1 0 : 0 0	安 田 1 8
9月 9日	1 0 : 0 0	医 中 大
9月 10日	1 0 : 0 0	ラグビー場 3
	1 0 : 0 0	安 田 1 1
	1 0 : 0 0	安 田 1
	1 : 0 0	列 品 館 1
9月 11日	1 0 : 0 0	安 田 5
	0 : 3 0	法 研 6
9月 12日	1 0 : 0 0	安 田 1 9